

(4) 幼児グループ：見立て遊びでじっくり遊ぶ・他者と関わる活動の工夫

1) 療育のねらい

子どもの見立て能力はいつ頃現れ、どのように発達するのだろうか。見立てとは、ある対象をそれとは異なった別の対象で表すことであり、象徴機能の発達と密接に関わる活動である。一般的な見立て能力の発達過程では、1歳を過ぎた頃に見立て遊びの基礎となるふり遊びが出現し、1歳半を1つの節目としてその能力が大きく発達していく。初期のふり遊びでは、大人の模倣行動を基礎にししながら道具操作を展開させ、何も入っていない空のコップで飲むまねをしたり、土でつくったハンバーグで食べるまねをしたりといった「つもり行動」と呼ばれる遊びがみられ始める（荒井他, 2007）。2歳後半あたりからは「バナナを電話に見立てる」、「積木をバスに見立てる」といった、イメージを介した見立て行動が出現する。そして、3歳を前後するころから、現在知覚されているもの（意味するもの）を用いて、そこにはないもの（イメージや概念）を代用するようになることとされる（荒井他, 2004）。荒井・荒木（2013）は、見立て遊び（見立て活動）を、目の前にないものを、まるでそこにあるかのようにふるまうことと定義している。この点において、見立て活動には「いま、ここ」を超えた想像力が必要となる。また ASD 児は、物に対して主体的に関わることはあっても、人への主体的な関わりは乏しいとされ、大人や他児との関わりを引き出すことが大きな課題であると考えられる（荒井他, 2007）

以上より、本グループは2014年度は、子どもたちにとって安心して遊べる場を目指し、スタッフ、他児に慣れ、「好きなあそびを見つけて、じっくりあそぶ」そして「お友だちを意識してあそぶ」ことをねらいとした。2015年度は、スタッフそして他児との関係を築き、参加児同士のやり取りや関わり合いが増えたことから、「お友だちを意識し、関わり合いながら遊ぶ」そして「大人やお友だちとイメージを共有して遊ぶ」をねらいとし、メインの活動となる設定遊びでは見立て遊びを意識的に取り入れ、参加児が活動のイメージを共有し、関わり合える工夫を行った。

2) 参加児

本療育プログラムの参加児は ASD 児 2 名およびきょうだい 2 名の計 4 名。スタッフは述べ 9 名（大学院生 5 名、大学院修了者 2 名、大学教員 1 名）であった。きょうだいとは、未診断であるが、そのきょうだいが ASD の診断を受けていることから、親の要望により活動に参加している児童のことである（きょうだいは別グループに所属）。

本療育グループは、2014 年 4 月に発足して 1 年半となる。発足前は、参加児のきょうだいが療育活動に参加し、親の会が実施される間、大学生を中心としたスタッフが保育をおこなっていた。その後、プログラムを計画・実行する活動の必要性が求められ発足に至った。発足当時は ASD 児 1 名およびきょうだい 2 名の 3 名が活動に参加していた。2015 年 9 月よりさらに ASD 児 1 名が参加し、4 名での活動となった。

3) 期間

2014 年 4 月から 2015 年 10 月の 1 年 7 ヶ月を分析対象期間とした。また各年 8 月は夏休みで活動を実施していないため、分析対象外とした。

4) 手続き

ASD 児ときょうだいを対象とした療育活動において参与観察を行った。活動場面は映像記録としてスタッフが手持ちのビデオカメラを用いて撮影された。活動当日の 2 週間前から 3 回から 4 回ほど、院生スタッフで療育プログラム作成のためのミーティングや準備（当日必要なものの工作等）を行った。活動後にはスタッフ全員でミーティングを行い、スタッフ間で子どもたちの様子など活動場面における情報を共有し、療育記録を作成した。以下に本療育活動と、主な分析場面にある「設定遊び」の詳細を記す（Table 2, 3 参照）。

5) 活動の流れ

月に 1 回、120 分の活動を行っている。各月のプログラムは複数の大学院生が中心となり、大学院修了生、療育経験者や大学教員のサポートのもとに実施されている。1 日の流れを Table 1 に示す。まず、来所した子どもたちが、そ

れぞれ好きな遊びを選択し、室内・室外で自由に遊ぶ時間を設定している。その後、パラバルーンなどを使用して、リトミックをおこなって、活動のメインとなる設定遊びへと移行する。設定遊び後には、おやつ時間を設け、全員が食べ終わり次第、設定活動のテーマに沿った絵本の読み聞かせを行って、活動を終了する。

Table1. 1日の活動の流れ (2015年度)

| 時間 | 活動内容 |
|-------|---------|
| 10:30 | 来室・自由遊び |
| 11:05 | リトミック |
| 11:15 | 設定活動 |
| 12:15 | おやつ |
| 12:20 | 絵本 |
| 12:25 | 帰りの会 |
| 12:30 | さようなら |

Table2. 2014年度の設定遊び

| 活動月 | 設定遊びのテーマ | 設定遊びの概要 | 参加児童数 | スタッフ数 |
|-----|--------------------------|--|-------|-------|
| 4月 | からだを使って遊ぼう | プレイルームに慣れ、巧技台やトランポリンを用いた動的な遊びと風船やボールを用いた静的な遊びを楽しむ | 2名 | 4名 |
| 5月 | 粘土で遊ぼう | いろんな道具を使って、粘土で見立て・ふり遊びを楽しむ | 2名 | 5名 |
| 6月 | 外で寒天あそびをしよう | 外に出てお散歩を楽しんだあとに、いろんな道具を使って、外での寒天あそびを楽しむ | 1名 | 4名 |
| 7月 | お散歩で見つけた素材をつかってみんなで絵を描こう | お散歩で見つけた葉っぱやどんぐり、絵具などを使って、みんなで大きな絵を作る | 2名 | 3名 |
| 8月 | くだもの探しとケーキ飾りをしよう | 紙粘土で作られたホールケーキの土台とくだものを用いてケーキの飾りつけをみんなでする。くだものは、行き馴れている散歩コースに隠し、みんなで探す | 3名 | 4名 |
| 9月 | みんなでクリスマスケーキ作り | クリスマスに関わるイメージを膨らまし、他児と関わりながらみんなでひとつのケーキづくりを楽しむ | 3名 | 3名 |
| 10月 | いろんな道具を使って自分だけのかばんを作ろう | 絵具やキラキラ糊、シールを使って、自分だけのかばんを作る | 3名 | 3名 |
| 11月 | 節分あそび - オニづくり & オニ退治をしよう | 傘袋と紙コップを使って鬼を作って、鬼退治の練習をして、鬼を退治する | 1名 | 3名 |
| 12月 | みんなでやきそばを作ろう | みんなで野菜を切って、炒め、美味しい焼きそばを作る | 3名 | 3名 |

Table 3. 2015 年度の設定遊び

| 活動月 | 設定遊びのテーマ | 設定遊びの概要 | 参加児童数 | スタッフ数 |
|-----|----------------------|--|-------|-------|
| 4月 | 電車ごっこを楽しみながら宝物を見つけよう | 手作り電車に乗って、いつもの散歩コースに駅を設け、道中素敵な宝物（草花・どんぐり・ねこ等）を発見する | 3名 | 3名 |
| 5月 | 寒天あそび - ゼリー屋さんになろう | 寒天や水を使って、ゼリーを作り、お店屋さんごっこをする | 2名 | 5名 |
| 6月 | 鬼をやっつけて、おやつを取り返そう | 鬼に取られた、みんなのおやつを取り返すために、鬼をやっつけるボールを集めて、鬼を倒す | 2名 | 7名 |
| 7月 | 天の川ゼリーをつくろう | ゼリーを星型など自分が好きな型で切り抜いて、天の川ゼリーを作る | 1名 | 6名 |
| 9月 | クッキーを作って、クッキー屋さんになろう | クッキーを型で切り抜き、クッキー屋さんになって、お母さんにたちに売ろう | 4名 | 7名 |
| 10月 | 仮装作りをしてハロウィンを楽しもう | 変身するもの・人をイメージして仮装づくりをし、仮装したらみんなでお菓子を貰いに行く | 3名 | 8名 |

6) エピソードと考察

2015年4月「電車ごっこを楽しみながら宝物を見つけよう」活動場面

プラスチック段ボールで作った4両編成の電車（連結が可能）に乗って、外を散策しながら、あらかじめ設置した駅に立ち寄りながら、宝物（草花、どんぐり、猫）を見つける。

エピソード：木の実

「いしころ えき」にて、思い思いに石ころや葉っぱを探しはじめる。見つけた宝物は、スタッフが持つ籠（宝物箱）に入れる

参加児 A：木の実を見つけ、もぎとると「これなんだろうかなあ」とつぶやく

スタッフ 1：「A、それ入れる？宝物箱に」

参加児 A：「たから」

スタッフ 1：「うん、宝入れる？」

参加児 A：「うん」と言いながら、木の実を剥き、中身を見ながら「ここに何かあるよ、ほら」

スタッフ1:「すごーい、なんか緑色のものが入ってる、2つ」「すごーい、みんなにも見せてあげようか」

参加児 A : 木の実をいくつかもぎ取る

スタッフ1: 他児2人に声かけをすると、2人は参加児Aのところまで来る

参加児 A : 他児2人に対し、「あっ、みんなのぶん（木の実）もとっておいたよ」

参加児 C : 「じゃあかして」

参加児 A : 地面に落としてしまった木の実を一生懸命探しながら「みんなのぶんは…」

スタッフ2: 「そこからもっと取ったら？」

参加児 A : 木の実を探しに行く

参加児 C : 「こっちなのか？」と木の葉を指さす

スタッフ2: 「そう、そこから取ったからね」と言うと他児2人も木の実を探しはじめる

参加児 C : 「さっきみえたからさ、こんなちいさいの」

参加児 B : 「あー！いたー！」

スタッフ2: 「あったね～」

スタッフ1: 「ぱっかーんってしたら、中からなんか出てきたんやって」

参加児 A : 「みんなのぶんもあけようっと」

スタッフ1: 「A、どうやって開けるのか教えてあげて、みんなに」

参加児 A : 「こうやってあけるよ、こうやって」と親指と人さし指で木の実をぎゅっと押さえる

スタッフ3: 「ぎゅって？」

参加児 C : 参加児Aの開ける様子を見ながら、木の実を指で押えつけながら「ぎゅうって？」

参加児 A : 「こうやってやるよ、こうやって」と爪で実を割る

参加児 C : 参加児Aの手元をのぞき込む

参加児 A : 「こうやってやる」

参加児 B : 木の実を指で押えつけながら、開けようとする

参加児 C : 「あっ、とんでいっちゃった (笑う)」 (木の実が手から落ちる)
全員 : 木の実を開けようとする
参加児 B : 「できたー」とスタッフ 1 に見せに来る
スタッフ 1 : 近くにいる参加児 C に対し「見て中から出てきたよ、ほら」
参加児 C : 「なにこれ? なんかのたね?」
スタッフ 1 : 「種かなあ、かわいい」
参加児 C : 「おうちみたいになっちゃった」
スタッフ 1 : 「お家みたいだね、種さんのお家だ」
参加児 C : 「でも、ありさんのおうちにもにあうんちゃう」
スタッフ 2 : 「そうかもしれんねえ、小さいしねえ」
参加児 A : スタッフ全員に木の実を渡しに来る
参加児 C : 手に木の実を持って「おうちがふたつできたよ」
参加児 B : 木の実をたくさん見つけ手のひらいっぱいを持つ
スタッフ 1 : 「ここに入れていいよ」と籠をさし出すと参加児 C が木の実を入れる
参加児 A : 「おたから」と言いながら木の実をもっと探す
参加児 3 人で木の実を探し、たくさん籠に入れる
参加児 A : 「おたからだよ、おたから」

2014 年度は、外遊びで散策することが参加児共通の楽しみとなっていた。時折、姿を見せる猫を探しながら、そして草花を拾いながら、共通したイメージを持って散策を楽しむことが多くみられたことから、2015 年度はじめの活動は、手作り電車にのって、ねこ駅、階段駅、石ころ駅などの駅を経由しながら宝物を見つけることを設定遊びのテーマとした。電車は、連結可能とし、はじめは 1 両編成、つまりひとりで思い思いに電車で歩いたあとは、連結して 4 両編成とし、運転手を交代しながら、各駅を目指した。上記エピソードは、電車ごっこも終盤にさしかかり、石ころ駅に着いた時のエピソードである。石ころ駅に到着するまで、参加児は宝物を見つけるという目的をより意識化するようになっていった。参加児 A が木の実を見つけ、スタッフに見せてきたことから、他児に見せることを提案したことで、スタッフを仲介としたやり取りで

はあるが、参加児同士での関わり合いが多くみられた。グループ発足からの1年、はじめは個々での遊びが多かったが、2年目を迎えた4月には互いを意識し、関わり合いを深めた様子がエピソードから示唆された。

7) 今後の課題

上記に示した通り、2015年では、新規児の参加により本グループのメンバーは4人となった。今後は、発達段階が異なる子どもの活動プログラムを、個々のニーズに沿いながら集団活動プログラムに組み込み、互いに関わり合う活動となるようなプログラムの検討と工夫が必要となっている。

引用文献

- 荒井庸子・松井真樹・張鋭・荒木穂積・渋谷郁子・安松あず紗・中原咲子・荒木美知子・早川美紗・吉田有希（2007）自閉症スペクトラム児のための療育プログラム開発（2）—幼児期：ふり遊びの分析から— 立命館人間科学研究, 14, 113-126.
- 荒井庸子・荒木穂積（2013）自閉症スペクトラム児における象徴機能と遊びの発達—ごっこ遊びから役割遊びへの発達過程の検討— 立命館人間科学研究, 26, 47-62.
- 春日彩花・藤戸麻美・安田祥子・松本梨沙・小島拓・古田絵理・富井奈菜実・中原咲子・荒木美知子・竹内謙彰・荒木穂積（2015）幼児期後期・学童期前期における自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発—集団でおこなう見立て活動とごっこ遊びを取り入れたプログラム— 立命館大学人間科学研究, 31, 35-52.

（文責：横田聖子）